

八〇頁。挿圖十三葉。附圖四六倍。四七葉定價金八圓(宮崎)

●國語索引

鈴木隆一編

讀みもせぬ本を索引で引いて調べるなどは横着だと叱る老大家もあるといふが、索引は便利なものである。考證學は清朝時代の大家の手によつて殆ど行く可き所まで行きついた觀があるそれよりも物覚えの悪い後の人が何か新しい事を試みやうとすれば、先人が蔑視して手をつけなかつた所をやるか、或は別に新しい方法を用ひねばならぬ。此處に新しい方法の一つとして「索引」作成が起つたので、日本でも支那でも現今は索引時代であるかの如き觀を呈してゐる

本書もその潮流に乗じたる一つとして現れたもので、東方正化學院京都研究所に於て正史・經書等幾多索引作成事業の中、卒先して功を竣へたものである。底本には士禮屠戮刻天聖明道本を用ひ正文並びに韋昭の解に就き、人名・地名を始め、天文・律曆・政治・道德・學術・教育・經濟・法制・祭祀・軍事・音樂・儀禮・器用・服食・傳説・俚諺・成語・訓詁に關する主要なる文字を標出して尋檢に便にす。排列は文字の筆劃の多少により、同劃のものは康熙字典の順序に従つてゐる。蓋し最も穩當なる方法であらう。

思ふに索引作成の事業たるや、非常なる根氣と精力を必要とするもので、一度カードに取りたる後に之を分類排列するのが一苦勞であり、最後に四六倍版にぎつしりつめられた六號活字

の校正の骨折がある所謂繰の下の力持となつてこの難事業に當つた編者は深く其勞を多とさる可きである。併しお蔭で讀まないで済む本が又一部殖えたと言つたらば益々老大家に叱られるであらう。(東方正化學院京都研究所發行。四六倍版。二七六頁。定價金貳圓)(宮崎)

●滿洲に於ける拳匪の叛亂 園田一龜著

●庚子年中俄在東三省之衝突及其結果 楊紹震著

西紀一九〇〇年北京に勃發せる義和拳匪の叛亂は忽ちにして滿洲に波及し、拳匪は此處に於いても亦官兵と結托して排外の烽火をあげた。虎視眈々極東侵略の手を擴げんとしてゐたロシアは好機至れりとして東三省に出兵し、全土に互つてこれを占領した。日露戰役は端をこゝに發する。かく劃期的な意義を有するに拘らずこの問題は從來閑却されてゐた。今、園田一龜氏の「滿洲に於ける拳匪の叛亂」(滿蒙自十五年第四號至第六號所載未完)及び楊紹震氏の「庚子年中俄在東三省之衝突及其結果」(清華學報第玖卷第一期所載)の二論文を得たるは吾人の欣快とする所である。

一、園田氏は長く滿洲に在り、清季外交史料、清光緒朝中日交渉史料、程中丞庚子函牘鈔略(庚子交渉隅錄)清史稿、拳匪紀事等の外、多年蒐集せられし滿洲各地志等の史料を以て本論文の根據とされた。遼陽(民國十一年刊)遼中・海城・蓋平・鐵嶺(民國六年刊)興京・東豐・復縣・莊河(民國十一年刊)懷德(民國十一年刊)海龍(民國十二年刊)通化

(民國十)安東・鳳城(民國十)順安・撫松・撫順・新民(民國十)營口(六年刊)各縣志、重修開原府志、寬甸、新安縣志略及び遼陽・蓋平(民國二)郷土志等の地志がそれである。かゝる多數の地方志は内地に在りて之を遍く閲覽することは殆ど不可能に屬する。氏はこれらの史料を利用して遼東・遼西に於ける拳匪の叛亂の特質・區域等を極めて詳細に述べ、續いてロシア軍隊の北滿・南滿に於ける活動を記述された。當時外國人の注意は専ら北支に向けられ、拳匪に關する著書は汗牛充棟の觀あるも滿洲に於ける拳匪の蹤跡及びロシアの動軍事蹟に就いて記せしものは零碎にして詳を知り難く、然らざれば傳聞に係るもの多く容易に信を取り難い。清國官憲も遽に國變に遭ひ東西奔竄潛匿して自救に選なく、これに關する記事を殘す餘裕がなかつた。前記諸地志にある記事は零碎なりと雖も趙璧に比すべきものである。然もそれとして正確を期し難いことはいふまでもない。故にこの問題に就いてはロシア人の記事は是非參考せねばならない。このことは岡田氏も入手に便ならざるを以て姑く措くと斷つて居られるが、吾人の寡聞を以てしてA. Z. Mitshlewski, Voennaya Dopytaya v. Kite, K. Kushakov, Yujno-Manchjurskic bezpo radki v 1900g, D. Yanchevski, U Steen Nedovijnavo Kita 等の諸書がある。ハルビン其他のロシア人について探訪すればこの他にも貴重なる史料を蒐集することが出来るかも知れない。將來に於いて氏の努力を期待する。又、この事件は當然外交交渉と關聯して考ふべきで、後日、續篇に於いて論及さる

、こと、想像する。

二、楊氏の論文に於いては拳匪の叛亂東三省に波及してロシア軍の東三省占領を招致し、盛京將軍增祺擅にロシア關東總督アレキシエフと暫且條約を締結し、引續いてその暫且條約の廢棄及び在滿ロシア軍の撤退に關する兩國の交渉が開かれてラムスドルフ・ウキツテと李鴻章・楊儒折衝に努め、楊・李相繼いで病死し慶親王・王文韶代つて一九〇二年四月改めて條約を締結するに至つた経緯が五節に分つて述べられ、最後に結論が加へられてゐる。Count Wile, Memoirs. の外 Romanow, Rossya v Manchjuri. を參考されたことはこの論文の價値を高めるものである。なほ同時に極東問題についてウキツテと反對意見を有せし Kurvatkin の Zapiski Generala Kurvatkina や Glin ski, Prolog Russko Yaponskoi Voini. 等を參考するべきであつたと思ふ。長期に互るこの複雑多岐を極めた経過を六十頁餘の論文に纏められたことには敬服するが、それだけ餘りに平面的にして事件の羅列に過ぎぬ感あるは遺憾である。

● 明史佛朗機傳考證

梁嘉彬著

● 葡萄牙第一次來華使臣事蹟考

張維華著

支那に關係せる近代外交史についての論文として前者は梁嘉彬氏の國立中山大學文史學研究所月刊第二卷第三・四期合刊所載、後者は張維華氏の史學年報第一卷第五期所載の二つがある。この問題については藤田博士(東西交渉史の研究)矢野博士(支

那近代外國關係)の論著があり、已に相當に研究が進められてゐる。兩氏共にこれらを參考せられたやうに見えないのは甚だ遺憾である。博引傍證は多とすべきであるが餘りに表面的にして、内面的考察を缺けるは兩者共通の弊である如く考へられる(妄評多罪(三國谷生))

● Joseph Vogt, Römische Republik, Freiburg im

Breisgau, 1832.

本書は H. Rinke, H. Junker, G. Schmirer 三氏の監修する Geschichte der führenden Völker 全三十巻中の第六巻として上梓されしもの J. Wolf 氏の手になるべきローマ帝政史の姉妹篇たるべきものである。オクタヴオ、本文三三二頁、圖版九葉、參考書目録一一頁、索引六頁よりなる。ローマ共和史については、既にニープール、モムゼン、フレツロ等の名著あるも夫等は皆浩瀚にして著者のローマ共和史のオリエンテールンクそのものを理解することすら容易でない。本書はイタリルの先史時代よりアウグストゥスのプリンケツプス政治確立迄のローマ史概説を目的としたものであつて、隨つて各事實に就いて精緻を缺くは言ふ迄もないが、著者のローマ共和史概観の仕方については決して凡ならざるものを示して居る。先づ本書の構成をみるに、次の四部に分たれて居る。

I. Teil, Geographie und historische Grundlagen S. 1—

23.

II. Teil, Die Republik und Italien. S. 24—73.

紹介

III. Teil, Die Republik und die Mittelmeerwelt. S.

74—165

IV. Teil, Die Republik und die Welt Herrschaft. S.

166—332

第一、第二兩部はローマ共和制確立前のイタリ人の文化及共和制成立より紀元前三世紀半に至るローマの政治的發展を概説したものであるが、此處にあつては先人の概説と特に相違あるを觀ない。第三、第四の二部はカルタゴ戰役よりアウグストゥスのプリンケツプス政治確立迄の概観である。カルタゴ戰役、東方ヘレニズム世界討伐を経て地中海世界を併呑するによつて起された政治的、社會的、その他文化一般に亘る變化過程をローマ精神とヘレニズム精神との或は融合に於て、或は對立に於て考察したものが第三部及び第四部である。我々は本書によつて著者が共和制ローマの發展を römische Kultur の發展時代と römisch-hellenistische Kultur の發展時代とに分たんとするを知るのである。この時代區分は共和制ローマの研究者にとつて大いなる問題を提供したものと嘗へやう。此區分が果して正しいか否か、又この區分が許されるとせば大體何時頃を以て時代轉換期とするか等については、尙事實の精密なる論證考察を必要とするであらう。蓋し本書は簡單にローマ共和史を概観せんと欲する者にも、ローマ共和史のオリエンテールンに就いて考慮ある者にも一讀さるべきものであらう。(井上)